

Charles Dickens と 5月7日 Charles Dickens and May 7

山崎 勉

Tsutomu YAMAZAKI

Charles Dickens は1850年5月7日付のJohn Forster宛の書簡 (*Pilgrim Letters* 6: 94–95所収) で *David Copperfield* の第14分冊に取り掛かったことに言及した後、「Dora [Spenlow] のことについては未決定であるが、今日そのことを決めなければならない」 (“Still undecided about Dora [Spenlow], but MUST decide to-day”) と記している。Pilgrim版のDickensの書簡集の編者達は、主人公Davidの若き日の雇い主Francis Spenlowの娘であり、後に「幼な妻」 (“child-wife”) と綽名されるDoraに関わる「そのこと」というのが、当の分冊で扱われている彼女とDavidとの結婚のことではなく、物語の終尾に近い53章に置かれることになる彼女の夭逝という筋立てのことであると注釈している (*Pilgrim Letters* 6: 94n)。確かに、彼らも指摘したように、Dickensが既に着手したと言っている第14分冊のためのNumber Planの冒頭には「DavidとDoraの結婚」 (“David’s Marriage to Dora”) という見出しが冠されているので、そのDoraに関わる事柄とは、どうやら、第16分冊執筆 (同年の7月) 前の時点まで遅らされることになった彼女の夭逝という筋立ての決定に関することであったようである (*Pilgrim Letters* 6: 131 & n)。

上述の決定が結局は2ヶ月程遅れざるを得なかったということになれば、その時点 (1850年5月7日) では、Doraの夭逝という筋立てについてのDickensの想念は未だ熟していなかったことになる。それでは、何故、彼は、“MUST” という強調表現を用いてまでも、その日にその決定が為されなければならないのだというような言い方をしたのであろうか。筆者はその理由の謎を解く鍵は5月7日という日付にあるのではないかと思う。本稿の目的は、その謎解きを中心として、5月7日という日付が持つDickensにとっての重要性を検証することである。

その謎解きの端緒として、問題の書簡の日付から遡ること丁度2年前の1848年5月7日付のDickensのForster宛の書簡に注目してみよう。Dickensは秘匿してい

た自らの過去の一端をこの書簡中で披瀝したようなのだが、その末尾に「11年前の今日、可哀想な愛しいMaryは天に召されたんだ」(“This day eleven years, poor dear Mary died,” Pilgrim Letters 5: 299)と添えている。そのMaryとは言うまでもなく、17歳でDoughty Street 48番地の彼の自宅で突然他界した彼の義妹Mary Hogarthのことである。Pilgrim版の書簡集の編者達もこの書簡の説明欄にその日付がMaryの夭逝から丁度11年目の命日のものであることを記している。

Maryの夭逝後の数年の間に友人・知人に送った書簡でDickensは、名指ししない場合もあるが、相対的に頻りに彼女に纏わることを話題にしている。例えば、5年後の1842年でも4通の書簡で彼は彼女のことを話題にしている。¹しかし、1843年以降となるとその数はかなり減って、全部で8通(現在既に印刷されているものとしては)しかないようである。²その裡の3通が彼女の命日、ないしは、5月8日、あるいは、5月9日という比較的その命日に近い日付のものである。前述した1848年のForster宛のものがそのひとつであり、他はMaryの肖像画の写しを寄贈してもらったことへの感謝を旨とする1843年5月8日付の義母に宛てたものと妻Catherineとの別居を弁明することを旨とした1858年5月9日付のMiss Burdett Coutts宛のものである。因に、義母に宛てたその1843年の書簡には、1848年5月7日付のForster宛のものと同様、DickensがMaryの命日を心に留めていたことが明示されている(“I was dressing to go to church yesterday morning—thinking, very sadly, of that time six years,” Pilgrim Letters 3: 483)

さて、上述した1843年以降のDickensの8通の書簡の裡の3通もの日付が彼女の命日、ないしは、それに近い日となっていること、そして、少なくともその3通の裡の2通の場合、それがDickensの記憶にその命日が深く刻まれているが故のことであること、さらに、その3通が1843年から1858年にかけて書かれたものであることが確認出来たところで、その3通の執筆時期の中間点で執筆された問題の1850年5月7日付のDickensの書簡に戻りたい。Maryの命日を彼が胸に銘記していることが明示された1848年5月7日付の書簡の受取人でもあるForsterに宛てられたこの書簡でDoraのことに触れた時、彼はその日がMaryの夭逝の日から数えて13年目の命日であったことを自覚していたのであろうか。上述したことを総合的に判断すると、彼はやはりその時Maryのことを思い出していたし、彼がそこに記した文言を契機としてMaryの死のことが記憶の淵から浮かび上がるのを意識していたと思われるForsterに、何らかのシグナルを送ってもいたのではないかと考えられるのだ。Dickens伝の終尾に近い“Personal Characteristics: 1836–70”と題された章で、DickensのMaryへの想いの持続性をForsterが念押しするように書き留めたのは(3: 485)、この書簡に窺われたような、彼へのシグナルを負荷されたDick-

ensの言い回しの積み重ねというものが一因となっていたのではないだろうか。

Pilgrim版の書簡集の編者達は1848年5月7日付のDickensのForster宛の書簡の説明欄にその日がMary Hogarthの命日であることを明記しながら、丁度2年後の日付を持つ件の書簡の説明欄には何らそのような記述をしていない。その理由としては、これら2通の書簡の文面の違い、つまり、前者に記されているMaryの夭逝のことが後者には見当たらないこと、さらに、Doraのモデルに関する従来諸家の意見に鑑みて、彼女の夭逝とMaryの夭逝とを結び付けることが妥当ではないと判断したことなどが考えられる。周知の如く、Doraのモデルとして挙げられるのはMaria Beadnell、ないしは、Dickensの妻 Catherineといったところが相場であり、後者の妹であるMaryがDoraのモデルの候補者となったことは筆者の知る限り皆無である。MaryはDickens自身が考え出した彼女の墓碑銘にあるように「若く、美しく、善良な」(“Young Beautiful And Good,” Pilgrim Letters 1: 259n)乙女の代表として、*Oliver Twist*のRose Maylie、*The Old Curiosity Shop*のLittle Nell、あるいは、*Dombey and Son*のFlorence Dombey、そして、*David Copperfield*ではDoraではなく理知的なAgnes Wickfieldのモデルとして取り沙汰されるのが常である。

それでは、何故Dickensは問題の書簡で、思わせぶりに“must”という単語を“MUST”と表記するようなことをして文意を強めたのかということになる。それはただ若い女性の死という筋立ての是非について考えなければならない状況とMaryの命日が重なったが故のことにすぎないのだろうか。Forsterへのシグナルという次元ではその解釈で間に合うかもしれない。換言すれば、DickensはForsterにはそのように解釈しておいてもらいたいと思っていたかもしれない。しかし、Dickensの心奥にはもう少し複雑で屈折した想いが潜んでいたのではないかと筆者は推測している。その想いとは、彼がMaryの夭逝の折に抱いた痛悔の念の残滓である。

1837年5月7日のMaryの突然の死に直面したDickensが深い悲しみに陥るとともに、彼女に対する自分の姿勢がその夭逝の一因となったのではないかという不安に駆られ、その後、痛悔の念を持つこととなったことについては*The Old Curiosity Shop*について論じた拙稿で既に指摘済みであるが(「Curiosity Shop」87–91)、ここでその要点のみを簡潔に見直しておきたい。

前述した1858年5月9日付のMiss Burdett Coutts宛のCatherineとの別居への弁明を旨とする書簡や他の書簡、例えば、Maryの精神的高揚を促す力に言及した1842年1月29日付のForster宛の書簡(Pilgrim Letters 3: 35)などから判断して、DickensのMaryに対する評価は明らかに妻に対する評価よりもかなり高い。そし

て、もちろん、Mary の方も義兄への尊敬と賞賛の言葉を惜しむことがなかったことは周知のことである。Mary は新婚の姉夫婦の不調和を肌で感じていた筈だという Miss Burdett Coutts 宛の書簡における Dickens の言葉が真とすれば (Pilgrim Letters 8: 560)、彼女は義兄と意気投合することに微妙なためらいすら感ずることもあったのではないだろうか。そんなある晩彼女は St. James Theatre で新婚夫婦を中心とした道ならぬ恋 (の振り)、嫉妬、疑念といったものから成る Dickens 自身の作品である喜歌劇 *Is She His Wife? or, Something Singular!* を姉と義兄とともに観たのである。

この喜歌劇では交わされる台詞の意味が会話する当の人物達だけでなく、その会話を立ち聴きする彼 (女) 等の伴侶等によっても二重・三重に誤解され、曲解されている。このような劇の観客達は、劇的アイロニーを楽しむと共に、自分達の現実の生活との関わりの裡にそれらの台詞を聴くようになってしまっているのではないだろうか。

夫、そして、夫の不倫の相手と誤解した Mrs. Limbury への批判をこめた女主人公 Mrs. Lovetown の「私が一番恐れていたことが現実のものとなってしまった。他の女性が好きになったから夫は私のことをないがしろにしているんだわ」(“My worst fears are realised, —my husband’s neglect is occasioned by his love for another,” 106) という台詞、あるいは、「私の平穏と幸福の破壊者 私の希望を滅茶苦茶にし、私の前途を真っ暗にしまったあの恥知らず」(“the destroyer of my peace and happiness—the wretch who has ruined my hopes and blighted my prospects,” 107) という彼女の Mrs. Limbury への罵りの言葉を耳にして、義兄への共感を惜しむことがなく、彼もそれに満更でもないことを知っていた筈の Mary はどのように反応したのであるか。彼女が乙女の胸を痛めたのかどうかということは今となっては知る術もない。しかし、少なくとも Dickens は一方的にでも彼女の側のそうした動揺の可能性ということを推量したのではないだろうか。ましてや、彼女がその晩に倒れ、翌日息を引き取ったということになれば、前から彼女の心臓に病があったということを聴かされたにしても、前夜の推量が裏打ちされたような気がしたことであろう。彼の痛悔の念はこのようにして生まれたと考えられるのである。

The Old Curiosity Shop に登場する Daniel Quilp は、その妻や義母 Mrs. Jiniwin、さらに、幾分か Dickens の父親 John の資質を持つ Trent 老人との関係からして、Dickens が自嘲的に自らの分身として呈示した人物と考えられるのだが、彼はその Quilp に Mary Hogarth をモデルとすることがしばしば言及される Little Nell への性的ないじめに近い言動をさせている。例えば、Quilp は、Nell もお年頃だから今の妻が死んだら次の Quilp 夫人にならないかと誘ったり (45)、「Quilp さんのお

膝に乗りに来たのかい」(“Has she come to sit upon Quilp’s knee?,” 86) とか「Nelly ちゃんはとても小父ちゃんのお好き。可愛い Nell ちゃん」(“Nelly’s very fond of me. Pretty Nell!,” 101) といったペドフィリック的な言葉を彼女に発している。14 歳になるかならぬかの Nell へのこの Quilp の姿勢には Dickens の Mary の死の際の痛悔の念がグロテスクに、そして、戯画的に逆反射されている節がある (山崎「Curiosity Shop」87-88)。

Quilp の Nell への性的ないじめの場면을執筆してから 10 年程の歳月が過ぎた 1850 年 5 月 7 日に Dickens は John へ件の書簡を送付した。“MUST”と表記された言葉を含む一文は、表面上の威勢の良さにもかかわらず、折り合いを付けることもかなわず 13 年間くすぶり続けた上述の彼の痛悔の念の重さの幾ばくかを担わされていると思われる。

これまでに取り挙げた 5 月 7 日ないしはその近辺の日付の Dickens の書簡と Mary との関係を考慮に入れる時、Mary への言及こそないものの、もう 1 通の 5 月 7 日付の書簡の看過出来ない重要性が垣間見えてくる。その書簡とは Mary 没後 20 年に当たる 1857 年の彼女の命日を日付とする Forster 宛の書簡である。その中で Dickens は執筆完了間近の *Little Dorrit* の舞台となった Marshalsea 監獄の跡地を前日訪問したこと、そして、その後で Gad’s Hill Place に赴いたことを Forster に告げている。Dickens がこれらのことを記した際にその日が Mary の命日であることを意識していたとすれば、この書簡には彼の人生を振り返る時に肝要な要素の裡の 4 つが凝縮されていたことになる。その 4 つの要素とは、即ち、彼の原風景といえる Marshalsea 監獄、子供時代の夢であった Gad’s Hill Place、青年期の彼の躍進の目撃者であり、恐らくは、その躍進に伴う歓喜の他の誰にも劣らぬ共有者であった Mary の死、そして、これらのもの全てを後世に知らしめることになる友人でありライバルであった Forster の存在である。筆者にはこのことが必ずしも偶然ではなく、Dickens によるかなり意図的な離れ業であったように思われるのだ。³

以上、Dickens が 1850 年に送った書簡中の一文とその書簡の 5 月 7 日という日付との関連性についての考察を介して、Mary Hogarth の夭逝とその命日に対する Dickens の並々ならぬ姿勢の一端を検証した。本稿で扱った 5 月 7 日付ないしはそれに近い日付の書簡の裡、彼が Mary の命日のことに言及した最後のものは彼女の夭逝から 11 年後の 1848 年 5 月 7 日付の Forster 宛のものである。その後の書簡で彼がそうしなかったのは、恐らくは、自分がそれ以上の長きに亘る歳月の間 Mary の命日という細部にまで固執していたことを知られることへの羞恥に近い感情に影響されてのことであったと考えられる。彼女の夭逝の際の痛悔の念が

注

- ¹ これら 4 通の書簡は全て Pilgrim 版の書簡集第 3 巻に収載されている。以下、その日付と宛先を列挙する。尚、ページ数は〔 〕内に示されている。 a. 1 月 29 日付 (John Forster 宛)〔33-36〕 b. 2 月 7 日付 (Rev. R. C. Waterson 宛)〔52-53〕 c. 2 月 12 日付 (Joseph S. Smith 宛)〔55-56〕 d. 4 月 26 日付 (John Forster 宛)〔208-11〕
- ² 1843 年以降の 8 通の書簡は以下のようなものである。尚、各書簡が収載されている Pilgrim 版の書簡集の巻数とページ数とは〔 〕内に示されている。 a. 1843 年 5 月 8 日付 (Mrs. George Hogarth 宛)〔3: 483-84〕 b. 1844 年 8 月 12 日付 (Thomas Mitton 宛)〔4: 175-79〕 c. 1844 年 9 月 30 (?) 日付 (John Forster 宛)〔4: 195-97〕 d. 1846 年 11 月 30 (?) 日付 (John Forster 宛)〔4: 668-70〕 e. 1848 年 5 月 7 日付 (John Forster 宛)〔5: 299〕 f. 1848 年 7 月 8 日付 (Mrs. George Hogarth 宛)〔5: 366〕 g. 1851 年 2 月 2 日付 (Dr. Thomas Stone 宛)〔6: 276-79〕 h. 1858 年 5 月 9 日付 (Miss Angela Burdett Coutts 宛)〔8: 558-60〕
- ³ この書簡に纏わる事柄についての筆者の意見が *The Dickensian* 80 (1984) の “When Found” の欄に採用されたことがあるが、本稿はそれをさらに敷衍したものである。

参考文献

- Dickens, Charles. *Complete Plays and Selected Poems of Charles Dickens*. London: Vision, 1970. 91-111.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Pilgrim Edition. 11 vols. to date. Oxford: Clarendon, 1965- .
- . *The Old Curiosity Shop*. London: Oxford UP, 1967.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. 3. London: Chapman, 1874. 3 vols. 1872-74.
- Sanders, Andrew. When Found [“The Appointed Time”]. *The Dickensian* 80 (1984): 124.
- 山崎 勉 「*The Old Curiosity Shop: Nell と Quilp と Dickens*」『アカデミア』（南山大学紀要）文学・語学編 48 (1990): 79-103.